

乞食学生

太宰治

青空文庫

大貧に、大正義、望むべからず

——フランソワ・ヴィヨン

第一回

一つの作品を、ひどく恥ずかしく思いながらも、この世の中に生きてゆく義務として、雑誌社に送ってしまった後の、作家の苦悶に就いては、聡明な諸君にも、あまり、おわかりになっていない筈である。その原稿在中の重い封筒を、うむと決意して、投函する。ポストの底に、ことり、と幽かな音がする。それつきりである。まずい作品であったのだ。表面は、どうにか気取って正直の身振りを示しながらも、その底には卑屈な妥協の汚い虫が、うじやうじや住んでいるのが自分にもよく判って、やりきれない作品であったのだ。それに、あの、甘ったれた、女の描写。わあと叫んで、そこらをくるくると走り狂いたい

ほど、恥ずかしい。下手くそなのだ。私には、まるで作家の資格が無いのだ。無智なのだ。私には、深い思索が何も無い。ひらめく直感が何も無い。十九世紀の、巴里の文人たちの間に、愚鈍の作家を「天候居士」と呼んで唾棄する習慣が在ったという。その気の毒な、愚かな作家は、私同様に、サロンに於て気のきいた会話が何一つ出来ず、ただ、ひたすらに、昨今の天候に就いてのみ語っている、という意味なのであろうが、いかさま、頭のわるい愚物の話題は、精一ぱいのところで、そんなものらしい。何も言えない。私の、たつたいま投函したばかりの作品も、まず、そんなところだ。昨日雪降る。実に、どうにも、驚きました。どうにも、その、驚いたです。雨戸をあげたら、こう、その、まあ一種の、銀世界、とでも、等と汗を拭き拭き申し上げるのであるが、一種も二種もない、実に、愚劣な意見である。どもつてばかりいて、颯爽たる断案が何一つ、出て来ない。私とて、恥を知る男子である。ままになる事なら、その下手くその作品を破り捨て、飄然どこか山の中にでも雲隠れしたいものだ、と思うのである。けれども、小心卑屈の私には、それが出来ない。きよう、この作品を雑誌社に送らなければ、私は編輯者に嘘をついたことになる。私は、きようまでには必ずお送り致します、といやに明確にお約束してしまっているのである。編輯者は、私のこんな下手な作品に対しても、わざわざページを空け

て置いて、今か今かと、その到来を待つてくれているのである。私はそれを知っているの
で、いかに愚劣な作品と雖も、みだりにそれを破棄することが出来ない。義務の遂行と言
えば、聞えもいいが、そうではない。小心非力の私は、ただ唯、編輯者の腕力を恐れてい
るのである。約束を破ったからには、私は、ぶん殴られても仕方が無いのだと思えば、生
きた心地もせず、もはや芸術家としての誇りも何もふっ飛んで、目をつぶって、その醜態
の作品を投函してしまうのである。よほど意気地の無い男である。投函してしまえば、そ
れつきりである。いかに悔いても、及ばない。原稿は、そのまますると編輯者の机上
に送り込まれ、それを素早く一読した編輯者を、だいいちばんに失望させ、とにかく印刷
所へ送られる。印刷所では、鷹のような眼をした熟練工が、なんの表情も無く、さつさと
拙稿の活字を拾う。あの眼が、こわい。なんて下手くそな文章だ。嘘字だらけじゃないか、
と思っているに違いない。ああ、印刷所では、私の無智の作品は、使い走りの小僧にまで、
せせら笑われているのだ。ついに貴重な紙を、どつさり汚して印刷され、私の愚作は天が
下かくれも無きものとして店頭にさらされる。批評家は之を読んで嘲笑し、読者は呆れる。
愚作家その檻樓の上に、更に一篇の醜作を附加し得た、というわけである。へまより出で
て、へまに入るとは、まさに之の謂いである。一つとしてよいところが無い。それを知つ

ていながら、私は編輯者の腕力を恐れるあまりに、わななきつつ原稿在中の重い封筒を、うむと決意して、投函するのだ。ポストの底に、ことり、と幽かな音がする。それつきりである。その後の、悲惨な気持は、比類が無い。

私はその日も、私の見事な一篇の醜作を、駅の前のポストに投函し、急に生きている事がいやになり、懐ふところ手でして首をうなだれ、足もとの石ころを蹴けころがし蹴けころがしして歩いた。まっすぐに家へ帰る気力も無い。私の家は、この三鷹駅から、三曲りも四曲りもして歩いて二十分以上かかる畑地のまん中に在るのだが、そこには訪ねて来る客も無し、私は仕事でもない限りは、一日いっぱい毛布にくるまって縁側に寝ころんでいて、読書にも疲れて、あくびばかりを連発し、新聞を取り上げ、こども欄の考えもの、亀、鯨くじら、兎うさぎ、蛙かえる、あざらし、蟻あり、ペリカン、この七つの中で、卵から生まれるものは何々でしょう、という問題に就いて、ちよつと頭をひねってみたり、それもつまらなくなり、あくびの涙がつつと頬を走って流れても、それにかまわず、ぼんやり庭の向うの麦畑を眺めて、やがて日が暮れるというような、半病人みたいな生活をしているのだから、いま、ただちに勇んで、たのしい我が家に引き返そうという気力も出て来ない。私は、家の方角とは反対の、玉川上水の土堤どてのほうへ歩いていった。四月なかば、ひるごろの事である。頭を挙げて見

ると、玉川上水は深くゆるゆると流れて、両岸の桜は、もう葉桜になっていて真青に茂り合ひ、青い枝葉が両側から覆いかぶさり、青葉のトンネルのようである。ひっそりしている。ああ、こんな小説が書きたい。こんな作品がいいのだ。なんの作意も無い。私は立ちどまって、なお、よく見ていたい誘惑を感じたが、自分の、だらしない感傷を恥ずかしく思い、その光るばかりの緑のトンネルを、ちらと見たばかりで、流れに沿うて土堤の上を、のろのろ歩きつづけた。だんだん歩調が早くなる。流れが、私をひきずるのだ。水は幽かに濁りながら、点々と、薄よごれた花びらを浮かべ、音も無く滑り流れている。私は、流れてゆく桜の花びらを、いつのまにか、追いかけているのだ。ばかのように、せつせと歩きつづけているのだ。その一群の花はなびら弁は、のろくなったり、早くなったり、けれども停滞せず、狡こうかつ猾わつに身軽くするする流れてゆく。万助橋まんすけばしを過ぎ、もう、ここは井の頭公園の裏である。私は、なおも流れに沿うて、一心不乱に歩きつづける。この辺で、むかし松本訓導という優しい先生が、教え子を救おうとして、かえって自分が溺死できしなされた。川幅は、こんなに狭いが、ひどく深く、流れの力も強いという話である。この土地の人は、この川を、人喰い川と呼んで、恐怖している。私は、少し疲れた。花びらを追う事を、あきらめて、ゆつくり歩いた。たちまち一群の花びらは、流れて遠のき、きらと陽に白く小さ

く光って見えなくなつた。私は、意味の無い溜息ためいきを、ほっと吐いて、手のひらで額ひたいの汗を拭き払つた時、すぐ足もとで、わあ寒い！ という叫び声だ。

私は、もちろん驚いた。尻餅しりもちをつかんばかりに、驚いた。人喰い川を、真白い全裸の少年が泳いでいる。いや、押し流されている。頭を水面に、すつと高く出し、にこにこ笑いながら、わあ寒い、寒いなあ、と言ひ私のほうを振り向き振り向き、みるみる下流に押し流されて行つた。私は、わけもわからず走り出した。大事件だ。あれは、溺死するにきまつている。私は、泳げないが、でも、見ているわけにはいかぬ。私は、いつ死んだつて、惜しくないからだである。救えないまでも飛び込み、共に死ななければならぬ。死所を得たというものかも知れぬ、などと、非論理的な愚鈍の事を、きれぎれに考えながら、なりも振りもかまわずに走つた。一言でいえば、私は極度に狼狽ろうばいしていたのである。木の根つますに躓いて顛倒てんとうしそうになつても、にこりともせず、そのまま、つんのめるような姿勢のまま、走りつづけた。いつもは、こんな草原は、蛇へびがいそうな故を以て、絶対に避けて通ることにしているのであるが、いまは蛇に食ひ附かれたつて構わぬ、どうせ直ぐに死ななければならぬからだである、ぜいたくを言つて居られぬ。私は人命救助のために、雑草を踏みわけ踏みわけ一直線に走っていると、

「あいたたた、」と突然背後に悲鳴が起り、「君、ひどいじゃないか。僕のおなかを、いやというほど踏んでいったぞ。」

聞き覚えのある声である。力あまつて二三歩よろめき前進してから、やっと踏みとどまり、振り向いて見ると、少年が、草原の中に全裸のまままで仰向けに寝ている。私は急に憤怒を覚えて、

「あぶないんだ。この川は。危険なんだ。」と、この場合あまり適切とは思えない叱咤の言を叫び威厳を取りつくろう為に、着物の裾すその乱れを調整し、「僕は、君を救助しに来たんだ。」

少年は上半身を起し、まつげの長い、うるんだ眼を、ずるそうに細めて私を見上げ、

「君は、ばかだね。僕がここに寝ているのも知らずに、顔色かえて駈けて行きやがる。見たまえ。僕のおなかの、ここんとここに君の下駄げたの跡が、くつきり附いてるじゃないか。君が、ここんとこを、踏んづけて行ったのだぞ。見たまえ。」

「見たくない。けがらわしい。早く着物を着たらどうだ。君は、子供でもないじゃないか。失敬なやつだ。」

少年は素早くズボンをはき、立ち上って、

「君は、この公園の番人かい？」

私は、聞えない振りをした。あまりの愚問である。少年は白い歯を出して笑い、
「何も、そんなに怒ること無いじゃないか。」

と落ちついた口調で言い、ズボンのポケットに両手をつつ込み、ぶらぶら私のほうへ歩み寄って来た。裸体の右肩に、桜の花弁が一つ、へばりついている。

「あぶないんだ。この川は。泳いじや、いけない。」私は、やはり同じ言葉を、けれども前よりはずつと低く、ほとんど呟くつぶやようにして言った。「人喰い川、と言われているのだ。それに、この川の水は、東京市の水道に使用されているんだ。清浄にして置かなくちゃ、いけない。」

「知ってるよ、そんなこと。」少年は、すこし卑屈な笑いを鼻の両側に浮かべた。近くで見ると、よほどとじとじた顔である。鼻が高くどがって、ちよつと上を向いている。眉は薄く、眼は丸く大きい。口は小さく、顎あごも短い。色が白いから、それでも可成りの美少年に見える。身長骨こっかく 髄こっかくも尋常である。頭は丸刈りにして、鬚ひげも無いが、でも狭い額には深い皺しわが三本も、くつきり刻まれて在り、鼻翼の両側にも、皺が重くたるんで、黒い陰影を作っている。どうかすると、猿のように見える。もう少年でないのかも知れない。私の足

もとに、どつかり腰をおろして、私の顔を下から覗のぞき、「坐らないかね、君も。そんなに、ふくれていると、君の顔は、さむらいみたいに見えるね。むかしの人の顔だ。足利あしかが時代と、桃山時代と、どつちがさきか、知ってるか？」

「知らないよ。」私は、形がつかぬので、腕をうしろに組み、その辺を歩きまわり、ぶっきらぼうな答えかたをしていた。

「じゃ、徳川十代將軍は、誰だか知ってるかい？」

「知らん！」ほんとうに知らないのである。

「なんにも知らないんだなあ。君は、学校の先生じゃないのかい？」

「そんなもんじゃない。僕は、」と言いかけて、少し躊躇ちゅうちよしたが、ええ、悪びれず言つてしまえと勇をふるつて、「小説を書いているんだ。小説家、というもんだ。」言つてしまつてから、ひどく尾籠びろうなことを言つたような気がした。

「そうかね。」相手は一向に感動せず、「小説家つて、頭がわるいんだね。君は、ガロアを知ってるかい？ エヴァリスト・ガロア。」

「聞いた事があるような、気がする。」

「ちえつ、外国人の名前だと、みんな一緒くたに、聞いたような気がするんだろう？ な

んにも知らない証拠だ。ガロアは、数学者だよ。君には、わかるまいが、なかなか頭がよかつたんだ。二十歳で殺されちゃつた。君も、も少し本を読んだら、どうかね。なんにも知らないじゃないか。可哀そうなアベルの話を知つてるかい？ ニイルス・ヘンリク・アベルさ。」

「そいつも、数学者かい？」

「ふん、知つていやがる。ガウスよりも、頭がよかつたんだよ。二十六で死んじゃつたのさ。」

私は、自分でも醜いと思われるほど急に悲しく気弱くなり、少年から、よほど離れた草原に腰をおろし、やがて長々と寝そべつてしまった。眼をつぶると、ひばりの声が聞える。

若き頃、世にも興ある驕きょうじ児じたり

いまごろは、人喜せつばす片言隻句せつくだも言えず

さながら、老猿

愛らしき一つも無し

人の気に逆らうまじと黙し居れば

老いぼれの敗北者よと指さされ

もの言えば

黙れ、これ、恥を知れよと袖をひかれる。(ヴィヨン)

「自信がないんだよ、僕は。」眼をあいて、私は少年に呼びかけた。

「へん。自信がないなんて、言える柄かよ。」少年も寝ころんでいて、大声で、侮蔑の言葉を返却して寄こした。「せめて、ガロアくらいでなくちや、そんないい言葉が言えないんだよ。」

何を言っても、だめである。私にも、この少年の一時期が、あつたような気がする。けさの知識は、けさ情熱を打ち込んで実行しなければ死ぬるほど苦しいのである。おそらくは、この少年も昨夜か、けさ、若くして死んだ大数学者の伝記を走り読みにしたのに違いはない。そのガロアなる少年天才も、あるいは、素裸で激流を泳ぎまくった事実があるのかも知れない。

「ガロアが、四月に、まっぴだかで川を泳いだ、とその本に書いていたかね。」私はお小
手をとるつもりで、そう言つてやつた。

「何を言つてやがる。頭が悪いなあ。そんなことで、おさえた気でいやがる。それだから、大人おとなはいやなんだ。僕は君に、親切で教えてやっているんじゃないか。先輩としての利己主義を、暗黙のうちに正義に化す。」

私は、いやな気がした。こんどは、本心から、この少年に敵意を感じた。

第二回

決意したのである。この少年の傲慢ごうまん無礼を、打ち擲ちやくしてしまおうと決意した。そうと決意すれば、私もかなりに兇悪酷冷の男になり得るつもりであった。私は馬鹿に似ているが、けれども、根からの低能でも無かつた筈である。自信が無いとは言つても、それはまた別な尺度から言っている事で、何もこんな一面識も無い年少の者から、これ程までにみそくそに言われる覚えは無いのである。

私は立つて着物の裾の塵ちりをぱつぱつと払い、それから、ぐいと顎をしゃくつて、

「おい、君。タンタリゼーションつてのは、どうせ、たかの知れてるものだ。かえつて今じゃ、通俗だ。本当に頭のいい奴は、君みたいな気取つた言いかたは、しないものだ。君

こそ、ずいぶん頭が悪い。様子ようすぶってるだけじゃ無いか。先輩が一体どうしたというのだ。誰も君を、後輩だなんて思つてやしない。君が、ひとりで勝手に卑屈へいくつになっているだけじゃないか。」

少年は草原に寝ころび眼をつぶつたまま、薄笑うすわらいして聞いていたが、やがて眼を細くあけて私の顔を横眼で見つて、

「君は、誰に言つているんだい。僕にそんなこと言つたつて、わかりやしない。弱るね。」
 「そうか。失敬した。」思わず軽く頭をさげて、それから、しまった！ と氣附いた。かりそめにも目前の論敵に頭をさげるとは、容易やすならぬ失態である。喧嘩けんかに礼儀は、禁物である。どうも私には、大人たいじんの風格がありすぎて困るのである。ちつとも余裕なんて無い。せに、ともすると余裕を見せたがつて困るのである。勝敗の結果よりも、余裕の有無のほうを、とかく問題にしたがる傾向がある。それだから、必ず試合には負けるのである。ほめた事ではない。私は氣を取り直し、

「とにかく立たないか。君に、言いたい事があるんだ。」
 胸に、或る計画けいかくが浮かんだ。

「怒つたのかね。仕様がねえなあ。弱い者いじめを始めるんじゃないだろうね。」

言う事がいちいち不愉快である。

「僕のほうが、弱い者かも知れない。どっちが、どうだか判ったものじゃない。とにかく起きて上衣うわぎを着たまえ。」

「へん、本当に怒つていやがる。どっこいしょ。」と小声で言つて少年は起き上り、「上衣なんて、ありやしない。」

「嘘をつけ。貧を銜てらう。安価なヒロイズムだ。さつさと靴くつをはいて、僕と一緒に来たまえ。」

「靴なんて、ありやしない。売っちゃったんだよ。」立ちつくし、私の顔を見上げて笑つている。

私は、異様な恐怖に襲われた。この目の前の少年を、まるっきりの狂人ではないかと疑つたのである。

「君は、まさか、」と言いかけて、どもつてしまった。あまりにも失礼な、恐しい質問なので、言いかけた当の私が、ベそをかいた。

「きのう迄は、あつたんだよ。要いらなくなつたから、売っちゃつた。シャツなら、あるさ。」と無邪気な口調で言つて、足もとの草原から、かなり上等らしい駱駝らくだ色のアンダアシ

ヤツを拾い上げ、「はだかで、ここまで来られるものか。僕の下宿は本郷だよ。ばかだね、君は。」

「はだして来たわけじゃ、ないだろうね。」私は尚も、しつこく狐疑した。甚だ不安なのである。

「ああ、陸の上は不便だ。」少年はアンダアシャツを頭からかぶって着おわり、「バイロンは、水泳している間だけは、自分の跛を意識しなくてよかつたんだ。だから水の中に居ることを好んだのさ。本当に、本当に、水の中では靴も要らない。上衣も要らない。貴賤貧富の別が無いんだ。」と声に気取つた抑揚をつけて言った。

「君はバイロンかい。」私は努めて興醒めの言葉を選んで言った。少年の相変らずの思わせぶりが、次第に鼻持ちならなく感ぜられて来たのである。「君は跛でもないじゃないか。それに、人間は、水の中にばかり居られるものじゃない。」自分で言いながら、ぞつとした程狂暴な、味気ない言葉であつた。毒を以て毒を制するのだ。かまう事は無い、と胸の奥でこつそり自己弁解した。

「嫉妬さ。妬けているんだよ、君は。」少年は下唇をちろと舐めて口早に応じた。「若い才能に遭うと、いたたまらなくなるものさ。否定し尽すまでは、

堪忍できないんだ。ヒステリイを起しちゃうんだから仕様が無い。話があるんなら、話を聞くよ。だらしが無いねえ、君は。僕を、どこかへ引っぱって行こうというのか？」

見ると、彼は、いつのまにやら、ちやんと下駄をはいている。買って間も無いものらしく、一見したところは私の下駄より、はるかに立派である。私は、なぜだか、ほっとした。救われた気持であった。浅間あさましい神経ではあるが、私も、やはり、あまりに突飛な服装の人間には、どうしても多少の警戒心を抱いてしまうのである。服装なんか、どうでもいいものだとは、昔から一流詩人の常識になっていて、私自身も、服装に就いては何の趣味も無し、家の者の着せる物を黙って着ていて、人の服装にも、まるで無関心なのであるが、けれども、やはり、それにも程度があつて、ズボン一つで、上衣も無し、靴も無しという服装には流石さすがに恐怖せざるを得なかつたのである。所詮しよせんは、私の浅間あさましい俗人根性なのであろう。いまこの少年が、かなり上等のシャツを着込み、私のものより立派な下駄をはいて、しゃんと立っているのを見て、私は非常に安心したのである。まずまず普通の服装である。狂人では、あるまい。さつき胸に浮かんだ計画を、実行しても差支え無い。相手は尋常の男である。膝ひざを交えて一論戦しても、私の不名誉にはなるまい。

「ゆっくり話をして、みたいんだがね。」私は技巧的な微笑を頬に浮かべて、「君は、さ

つきから僕を無学だの低能だのと称しているが、僕だって多少は、名の有る男だ。事実、無学であり低能ではあるが、けれども、君よりは、ましだと思っている。君には、僕を侮辱する資格は無いのだ。君の不当の暴言に対して、僕も返礼しなければならぬ。」なかなか莊重な出来である。それにも拘らず、少年は嘖き出した。

「なあんだ、僕と遊びたがっていやがる。君も、よっぽどひまなんだね。何か、おごれよ。おなが、すいた。」

私も危く大笑いするところであつたが、懸命に努めて洩面を作り、

「ごまかしては、いかん。君は今、或る種の恐怖を感じていなければならぬところだ。とにかく、僕と一緒に来給え。」ともすると笑い出しそうになって困るので、私は多少狼狽して後をも振り向かず急いで歩き出した。

私の計画とは、計画という言葉さえ大袈裟な程の、ほんのささやかな思いつきに過ぎないのである。井の頭公園の池のほとりに、老夫婦二人きりで営んでいる小さい茶店が一軒ある。私は、私の三鷹の家に、ほんのたまに訪れて来る友人たちを、その茶店に案内する事に行っているのである。私は、どういうわけか、家に在る時には頗る口が重い。ただ、まごまごしている。たまに私の家に訪れて来る友人は、すべて才あり学あり、巧まずして

華麗高潔の芸論を展開するのであるが、私は、れいの「天候居士」ゆえ、いたずらに、あの、とばかり申して膝をゆすり、稀まれには、へえ、などの平伏の返事まで飛び出す始末で、われながら、みつともない。かくては、襖ふすまの蔭で縫いものをしていゝ家の者に迄あなどられる結果になるやも知れぬという、けち臭い打算から、私は友人を屋外に誘い出し、ともかくにも散策を試み、それでもやはり私の旗はたいろ色は呆れる程に悪く、やりきれず、遂には、その井の頭公園の池のほとりの茶店に案内するという段取りになるのであった。この茶店の床しょうぎ几の上に、あぐらをかけば、私は不思議に蘇そせい生するのである。その床几の上に、あぐらをかいて池の面を、ぼんやり眺め、一杯のおしるこ、或あるいは甘酒をすすするならば、私の舌端は、おもむろにほどけて、さて、おのれの思念開陳は、自由濶達、ふだん思つてもいない事まで、まことしやかに述べ来り、説き去り、とどまるところを知らぬ状態に立ち到つてしまうのである。この不思議の原因は、私も友人も、共に池の面を眺めながら話を交すというところに在るらしい。すなわち、談話の相手と顔を合わせずに、視線を平行に池の面に放射しているとところに在るらしいのである。諸君も一度こころみるがい。両者共に、相手の顔を意識せず、ソファに並んで坐つて一つの煖炉の火を見つめながら、その火焰に向つて交互に話し掛けるような形式を執とるならば、諸君は、低能のマダムと三

時間話し合つても、疲れる事は無いであろう。一度でも、顔を見合わせてはいけない。私は、その茶店では、頑強に池の面ばかりを眺めて、辛うじて私の弁舌の糸口を摘出することに成功するのである。その茶店の床几は、謂わば私のホオムコオトである。このコオトに敵を迎えて戦うならば、私は、デイドロ、サント・ブウヴほどの毒舌の大家にも、それほど醜い惨敗はしないだろうとも思われるけれど、私には学問が無いから、やつぱり負けるかも知れない。私には、あの人たちほどフランス語が話せない。そこに、その茶店の床几に、私は、この少年を連れて行って、さっきの悪罵の返礼をしようと、たくらんでいたのである。私を、あまりにも愚弄した。少し、たしなめてやらなければならぬ。

若い才能と自称する浅墓あさはかな少年を背後に従え、公園の森の中をゆつたり歩きながら、私は大いに自信があつた。果して私が、老いぼれのぼんくらであるかどうか、今に見せてあげる。少年は、私について歩いているうちに次第に不安になって来た様子で、ひとり何かと呟つぶやきはじめた。

「僕の母はね、死んだのだよ。僕の父はね、恥ずかしい商売をしているんだよ。聞いたら驚くよ。僕は、田舎者だよ。モラルなんて無いんだ。ピストルが欲しいな。パンパンと電線をねらつて撃つと、電線は一本ずつプツンプツンと切れるんだ。日本は、せまいな。か

なしい時には、素はだかで泳ぎまくるのが一番いいんだ。どうして悪いんだろう。なんにも出来やしないじゃないか。めつたな事は言われねえ。説教なんて、まっぴらだ。本を読めば書いてあらあ。放ほつて置いてくれたつて、いいじゃないか。僕はね、さえき五一郎つて言うんだよ。数学は、あまり得意じゃないんだ。怪談が、一ばん好きだ。でもね、おばけの出方には、十三とおりしか無いんだ。待てよ、提ちようちん燈 ヒユウのモシモシがあるから、十四種類だ。つまらないよ。」

わけの判らぬような事を、次から次と言いつづけるのであるが私は一切之を黙殺した。聞えない振りをして森を通り抜け、石段を降り、弁天様の境内を横切り、動物園の前を通つて池に出た。池をめぐつて半町ほど歩けば目的の茶店である。私は残忍な気持で、ほくそ笑んだ。さつきこの少年が、なあんだ遊びたがつていやがる、と言つたけれど、私の心の奥底には、たしかにそんな軽はずみな虫も動いていたようである。それから、もう一つ。次の時代の少年心理を、さぐつてみたいという、けちな作家意識も、たしかに働いて、自分から進んでこの少年に近づいていったところもあつたのである。ばかな事をしたものだ。おかげで私はそれから、不幸、戦せんりつ慄、醜態の連続の憂目を見なければならなくなったのである。

茶店に到着して、すなわち床しやうぎ几にあぐらをかいて、静かに池の面に視線を放ち、これでよし、と再び残忍な気持でほくそ笑んだところ迄は上出来であったが、それから、いけなかった。私がおしるこ二つ、と茶店の老婆に命じたところ、少年は、

「親子どんぶりがあるかね？」と私の傍に大きなあぐらをかいて、落ちついて言い出したので、私は狼狽した。私の袂たもとには、五十銭紙幣一枚しか無いのである。これは先刻、家を出る時、散髪せよと家の者に言われて、手渡されたものなのである。けれども私は、悪質の小説の原稿を投函して、たちまち友人知己の嘲笑が、はつきり耳に聞え、いたたまらなくなつてその散髪の義務をも怠つてしまつたのである。

「待て、待て。」と私は老婆を呼びとめた。全身かつと熱くなつた。「親子どんぶりは、いくらだね。」下等な質問であつた。

「五十銭でございます。」

「それでは、親子どんぶり一つだ。一つでいい。それから、番茶を一ぱい下さい。」
「ちえつ、」少年は躊躇なく私をせせら笑つた。「ちやつかりしていやがら。」

私は、溜息をついた。なんと言われても、致しかたの無いことである。私は急に、いやになつた。こんなに誇りを傷つけられて、この上なにを少年に説いてやろうとするのか。

私は何も言いたくなくなつた。

「君は、学生かい？」と私は、実に優しい口調で、甚だ月並な質問を発してしまつた。眼は、それでもやはり習慣的に池の面を眺めている。二尺ちかい緋鯉ひごいがゆらゆら私たちの床几の下に泳ぎ寄つて来た。

「きのうまでは、学生だつたんだ。きょうからは、ちがうんだ。どうでもいいじゃないか、そんな事は。」少年は、元氣よく答える。

「そうだね。僕もあまり人の身の上に立ちいることは好まない。深く立ちいつて聞いてみたつて、僕には何も世話の出来ない事が、わかつているんだから。」

「俗物だね、君は。申しわけばかり言つてやがる。目茶苦茶や。」

「ああ、目茶苦茶なんだ。たくさん言いたい事も、あつただけけれど、いやになつた。だまつて景色でも見ているほうがいいね。」

「そんな身分になりたいよ。僕なんて、だまつていたくても、だまつて居れない。心にもない道化でも言つていなければ、生きて行けないんだ。」大人おとなびた、誠実のこもつた声であつた。私は思わず振り向いて、少年の顔を見直した。

「それは、誰の事を言つているんだ。」

少年は、不機嫌に顔をしかめて、

「僕の事じゃないか。僕は、きのう迄、良家の家庭教師だったんだぜ。低能のひとり娘に代数を教えていたんだ。僕だって、教えるほど知ってやしない。教えながら覚えるという奴さ。そこは、ごまかしが、きくんだけでも、幫間ほうかんの役までさせられて、「ふっと口を噤つぶんだ。」

第三回

茶店の老婆が、親子どんぶりを一つ、盆ぼんに捧げて持って来た。

「食べたら、どうかね。」

少年は、急に顔を真赤にして、「君は？ 食べないの？」と人が変わったようなおどおどした口調で言つて、私の顔を覗のぞき込む。

「僕は、要いらない。」私は、出来るだけ自然の風を装って番茶を飲み、池の向うの森を眺めた。

「いただきます。」と少年の、つつましい小さい声が聞えた。

「どうぞ。」と私は、少年をてれさせないように努めて淡泊の返事をして、また、ゆつくりと番茶を啜り、少年の事など全く無関心であるかのよう池の向うの森ばかりを眺めていた。あの森の中には、動物園が在る。きあつと、裂帛の悲鳴が聞えた。

「孔雀だよ。いま鳴いたのは孔雀だよ。」私はそう言つて、ちよつと少年のほうを振り向いてみると、少年は、あぐらの中に、どんぶりを置き、顔を伏せて、箸を持った右手の甲で矢鱈に両方の眼をこすつている。泣いている。

その時には、私は、ただ困つた。何事も知らぬ顔して、池のほうへ、そつと視線を返し、自分の心を落ちつかせる為に袂から煙草を取出して一服吸つた。

「僕の名はね、」あきらかに泣きじやくりの声で、少年は、とぎれとぎれに言い出した。

「僕の名はね、佐伯五一郎つて言うんだよ。覚えて置いてね。僕は、きつと御恩返しをしてやるよ。君は、いい人だね。泣いたりなんかして、僕は、だらしが無いなあ。僕はごはんを食べていると、時々むしように侘しくなるんだ。悲しい事ばかり、一度にどつと思ひ出しちゃうんだ。僕の父はね、恥ずかしい商売をしているんだ。田舎の小学校の先生だよ。二十年以上も勤めて、それでも校長になれないんだ。頭が悪いんだよ。息子の僕にさえ、恥ずかしがつているんだよ。生徒も、みんな、ばかにしているんだ。マンケという綽名だ

よ。だから、僕は、偉くならなくちやいけないんだ。」

「小学校の先生が、なぜそんなに恥ずかしい商売なんだ。」私は、思わず大声になり、口を尖らせて言った。^{とが}「僕だつて、小説が書けなくなつたら、田舎の小学校の先生になろうと思つてゐる。本当に良心をもつて、情熱をぶち込める仕事は、この二つしか世の中に無いと思つてゐる。」

「知らないんだよ、君は。」少年の声も、すこし大きくなつた。「知らないんだよ。村の金持の子供には、先生のほうから御機嫌をとらなくちやいけないんだ。校長や、村長との関係も、それや、ややこしいんだぜ。言いたくもねえや。僕は、先生なんていやだ。僕は、本気に勉強したかつたんだ。」

「勉強したら、いいじゃないか。」根が、狭量の私は、先刻この少年から受けた侮辱を未だ忘れかねて、やはり意地悪い言いかたをしていた。「さっきの元氣は、どうしたんだい。だらしの無い奴だ。男は、泣くものじゃないよ。そら、鼻でもかんで、しゃんとし給え。」私は、やはり池の面を眺めたままで、懐中の一帖の鼻紙を、少年の膝のほうに、ぽんと抛つてやつた。

少年は、くすと笑つて、それから素直に鼻をかんで、

「なんと言ったらいいのかなあ。へんな氣持なんだよ。親爺おやじを喜ばせようと思つて勉強していても、なんだか落ちつかないんだよ。五次方程式が代数的に解けるものだから、どうだか、発散級数の和が、有ろうと無からうと、今は、そんな迂遠うげんな事をこね廻している時じやないつて、誰かに言われているような氣がするのだ。個人の事情を捨てろつて、こないだも、上級の生徒に言われたよ。でも、そんな事を言う生徒は、たいてい頭の悪い、不勉強な奴やつにきまつているんだ。だから、なんだか、へんな氣持になつちやうんだよ。迂遠な學問なんかを、している時じや無い。肉体を、ぶつつけて行く練習だけの時代なのかしら。考えると、とても心細くなるんだよ。」

「君はそれを怠惰たいだのいい口実にして、學校をよしちやつたんだな。事大主義というんだよ。大地震でも起つて、世界がひっくりかえつたら、なんて事ばかり夢想している奴なんだね、君は。」私は、多少いい氣持でお説教をはじめた。「たった一日だけの不安を、生涯の不安と、すり変えて騒ぎまわっているのだ。君は秩序のネセシテイを信じないかね。ヴァレリーの言葉だけでもね、」と私は軽く眼をつぶり、あれこれと考えをまとめる振りして、やがて眼をひらき、中々きざな口調で、「法律も制度も風俗も、昔から、ちつとは氣のきいた思想家に、いつでも攻撃され、輕蔑されて来たものだ。事実また、それを擲擻やくし皮肉ひにく

るのは、いい気持のものさ。けれども、その皮肉は、どんなに安易な、危険な遊戯であるか知らなければならぬ。なんの責任も無いんだからね。法律、制度、風俗、それがどんなに、くだらなく見えても、それが無いところには、知識も自由も考えられない。大船に乗っていないながら、大船の悪口を言っているようなものさ。海に飛び込んだら、死ぬばかりだ。知識も、自由思想も、断じて自然の産物じゃない。自然は自由でもなく自然は知識の味方をするものでもないと言うんだ。知識は、自然と戦って自然を克服し、人為を建設する力だ。謂わば、人工の秩序への努力だ。だから、どうしても、秩序とは、反自然的な企画なんだが、それでも、人は秩序に拠よらなければ、生き伸びて行く事が出来なくなっている、というんだがね。君が時代に素直で、勉強を放ほう擲てきしようとする気持もわかるけれど、秩序の必然性を信じて、静かに勉強を続けて行くのも亦また、この際、勇気のある態度じゃないのかね。発散級数の和でも、楕円函数でも、大いに研究するんだね。「私は、やや得意であった。言い終って、少年の方を、ちらと伺って見ると、少年は、私のお説教を半分も聞いていなかったらしく、無心に、ごはんを食べていた。「どうかね。わかったかね。」私は、しつこく賛意を求めた。少年は顔を挙げ、ごはんを呑み込んでから言った。

「ヴァレリイってのは、フランスの人でしよう？」

「そうだ。一流の文明批評家だ。」

「フランスの人だったら、だめだ。」

「なぜ？」

「戦敗国じゃないか。」少年の大きな黒い眼には、もう涙の跡も無く、涼しげに笑っている。「亡国の言辞ですよ。君は、人がいいから、だめだなあ。そいつの言ってる秩序ってのは、古い昔の秩序の事なんだ。古典擁護に違いない。フランスの伝統を誇っているだけなんですよ。うっかり、だまされるところだった。」

「いや、いや、」私は狼狽して、あぐらを組み直した。「そういう事は無い。」

「秩序って言葉は、素晴しいからなあ。」少年は、私の拒否を無視して、どんぶりを片手に持ったまま、ひとりで詠嘆の言葉を発し、うつとりした眼つきをして見せた。「僕は、フランス人の秩序なんて信じないけれど、強い軍隊の秩序だけは信じているんだ。僕には、ぎりぎりに苛酷の秩序が欲しいのだ。うんと自分を、しばってもらいたいのだ。僕たちは、みんな、戦争に行きたくてならないのだよ。生ぬるい自由なんて、飼い殺しと同じだ。何も出来やしないじゃないか。卑屈ひくつになるばかりだ。銃後はややこしくて、むずかしいねえ。」

「何を言つてやがる。君は、一ばん骨の折れるところから、のがれようとしているだけなんだ。千の主張よりも、一つの忍耐。」

「いや、千の知識よりも、一つの行動。」

「そうして君に出来る唯一の行動は、まっばだかで人喰い川を泳ぐだけのものじゃないか。ぶんを知らなくちやいけない。」私は、勝つたと思つた。

「さつきは、あれは、特別なんだよ。」少年は、大人のような老いた苦笑をもらした。

「どうも、ごちそうさま。」と神妙にお辞儀して、どんぶりを傍に片付け、「事情があつたんだよ。聞いてくれるかね?」

「言つてみ給え。」騎虎きこの勢である。

「言つてみたつて、どうにもならんけど、このごろ僕は、目茶苦茶なんだよ。中学だけは、家のお金で卒業できたのだけれど、あとが続かなかつたんだ。貧乏なんだよ。僕は数学を、もつと勉強したかつたから、父に無断で高等学校に受けて、はいつたんだ。葉山さんを知つてるかい? 葉山圭造。いつか、鉄道の参与官か何かやっていた。代議士だよ。」

「知らないね。」私は、なぜだか、いらいらして来た。どうも私は、人の身の上話を聞く事は、下手である。われに何の関りかかわあらんや、という気がして来るのである。黙つて聞い

ているうちに、自分の肩にだんだん不慮の責任が覆いかぶさって来るようで、不安なやら、不愉快なやら、たまらぬのである。その人を、気の毒と思っても、自分には何も出来ぬという興醒めな現実が、はつきりわかっているのです、なおさら、いやになるのだ。「代議士なんてのは、知らないね。金持なのかい？」

「まあ、そうだ。」少年は、ひどく落ちついた口調である。「僕の郷土の先輩なんだ。郷土の先輩なんて、可笑しなものさ。同じお国訛があるだけさ。僕は、その人からお金をもらって、いや、ただもらっていたわけじゃ無いんだ。僕は、教えていたんだ。」

「教えながら教わっていたのかね。」私は、早くこの話を、やめてもらいたかった。少しも興味が無い。

「女学校三年の娘がひとりいるんだ。団子だんごみたいだ。なっちゃんない。」

「ほのかな恋愛かね。」私は、いい加減な事ばかり言っていた。

「ばか言っちゃいけない。」少年は、むきになった。「僕には、プライドがあるんだ。このごろ、だんだんそいつが、僕を小使みたいに扱って来たんだよ。奥さんも、いけないんだがね。とうとう、きのう我慢出来なくなっちゃって、——」

「僕は、つまらないんだよ、そういう話は。世の中の概念でしか無い。歩けば疲れる、と

いう話と同じ事だ。」私は、この少年と共に今まで時を費したのを後悔していた。

「君は、お坊ちゃん育ちだな。人から金をもらう、つらさを知らないんだ。」少年は、負けていなかった。「概念的だつていい。そんな、平凡な苦しさを君は知らないんだ。」

「僕だつて、それや知っているつもりだがね。わかり切った事だ。胸に畳たたんで、言わないだけだ。」

「それじゃ君は、映画の説明が出来るかね？」少年と私とは、先刻から、視線を平行に池の面に放つて、並んで坐つたままなのである。

「映画の説明？」

「そうさ。娘が、この春休みに北海道へ旅行に行つて、そうして、十六ミリというのかね、北海道の風景を、どつきり撮影して来たというわけさ。おそろしく長いフィルムだ。僕も、ちよつと見せてもらったがね。しどろもどろの実写だよ。こんどそれを葉山さんのサロンで公開するんだそうだ。所謂いわゆる、お友達、を集めてね。ところが、その愚劣な映画の弁士を勤めて、お客の御機嫌を取り結ぶのが、僕の役目なんだそうだ。」

「それもいい。」私は、大声で笑つてしまった。「いいじゃないか。北海道の春は、いまだ浅くして、——」

「本気で言ってるのかね？」少年の声は、怒りに震えているようであった。

私は、あわてて頬を固くし、真面目な口調に返り、

「僕なら、平気でやってのけるね。自己優越を感じている者だけが、真の道化をやれるんだ。そんな事で憤慨して、制服をたたき売るなんて、意味ないよ。ヒステリズムだ。どうにも仕様がなないものだから、川へ飛びこんで泳ぎまわったりして、センチメンタルみたいじゃないか。」

「傍観者は、なんとも言えるさ。僕には、出来ない。君は、嘘つきだ。」
私は、むっとした。

「じゃ、これから君は、どうするつもりなんだい。わかり切った事じゃないか。いつまでも、川で泳いでいるつもりなのか。帰るより他は無いんだ。元の生活に帰り給え。僕は忠告する。君は、自分の幼い正義感に甘えているんだ。映画説明を、やるんだね。なんだい、たった一晚の屈辱じゃないか。堂々と、やるがいい。僕が代ってやってもいいくらいだ。」
最後の一言がいけなかった。とんでも無い事になったのである。私は少年から、嘘つき、と言われ、奇妙に痛くて逆上し、あらぬ事まで口走り、のっぴきならなくなったのである。
「君に、出来るものか。」少年は、力弱く笑った。

「出来るとも。出来るよ。」とむきになって言い切った。

それから一時間のち、私は少年と共に、渋谷の神宮通りを歩いてきた。ばかばかしい行為である。私は、ことし三十二歳である。自重しなければならぬ。けれども私は、この少年に、口さきばかり、と思われたくないばかりに、こうして共に歩いている。所詮は私も、自分の幼い潔癖に甘えていたのかも知れない。私は自分の不安な此の行動に、少年救済という美名を附して、わずかに自分で救われていた。溺れかけている少年を目前に見た時は、よし自分が泳げなくとも、救助に飛び込まなければならぬ。それが市民としての義務だ、と無理矢理自分に思い込ませるように努力していた。全く、単に話の行きがかりから、私は少年の代りに一夜だけ、高等学校の制服制帽で、葉山家に出かけて行かなければならなくなつたのである。佐伯五一郎の友人として、きようは佐伯が病気ゆえ、代りに僕が参りましたがと挨拶して、「早春の北海道」というその愚にもつかぬ映画を面白おかしく説明しなければならなくなつた。

私には、もとより制服も制帽も無い。佐伯にも無い。きのう迄は、あつただけけれど、靴もろとも売ってしまったというのである。借りに行かなければならぬ。佐伯は私の実行力を疑い、この企画に躊躇ちゆうちよしていたようであつたが、私は、少年の逡巡しゆんじゆんの様を見

て、かえつて猛りたち、佐伯の手を引かんばかりにして井の頭の茶店を立ち出で、途中三鷹の私の家に寄つて素早く鬚を剃り大いに若がえつて、こんどは可成りの額の小遣錢を懐中して、さて、君の友人はどこにいるか、制服制帽を貸してくれるような親しい友人はいないか、と少年に問い、渋谷に、ひとりいるという答を得て、ただちに吉祥寺駅から、帝都電鉄に乗り、渋谷に着いた。私は少し狂つていたようである。

神宮通りをすたこら歩いた。葉山家、映画の会は、今夜だという。急がなければならぬ。「ここです。」少年は立ちどまつた。

古い板塀の上から、こぶしの白い花が覗いていた。素人下宿らしい。

「くまもとう！」と少年は、二階の障子に向つて叫んだ。

「くまもと、くん。」と私も、いつしか学生になつたつもりで、心易く大声で呼びたてた。

第四回

ワグネル君、

正直に叫んで、

成功し給え。

しんに言いたい事があるならば、

それをそのまま言えばよい。(ファウスト)

「はい。」という女のように優しい素直な返事が二階の障子の奥から聞えて来たので、私は奇妙に拍子抜けがした。いやしくも熊本君ともあろうものが、こんな優しい返事をするとは思わなかった。青本女之助とでも改名すべきだと思った。

「佐伯だあ。あがつてもいいかあ。」少年佐伯のほうが、よっぽど熊本らしい粗暴な大声で、叫ぶのである。

「どうぞ。」

実に優しかった。

私は呆れて噴き出した。佐伯も、私の気持を敏感に察知したらしく、

「デイリツタンテイなんだ。」と低い声で言つて狡猾こうかつそうに片眼をつぶつてみせた。

「ブルジョアさ。」

私たちは躊躇せず下宿の門をくぐり、玄関から、どかどか二階へ駆けあがった。

佐伯が部屋の障子をあげようとすると、

「待って下さい。」と懸命の震え声が聞えた。やはり、女のように甲かんだか高い細い声であったが、せつぱつまつたものの如く、多少は凜りんとしていた。「おひとり？ お二人？」

「お二人だ。」うっかり私が答えてしまった。

「どなた？ 佐伯君、一緒の人は、誰ですか？」

「知らない。」佐伯は、当惑の様子であった。

私は、まだ佐伯に私の名前を教えていなかったのである。

「木村武雄、木村武雄。」と私は、小声で佐伯に教えた。太宰ださいというのは、謂いわばペンネームであつて、私の生まれた時からの名は、その木村武雄なのである。なんとも、この名前が恥ずかしく、私は痩せている癖に太宰ださいなぞという喧嘩けんかの強そうな名前を選んで用いているわけであるが、それでも、こんなに気持のせいしている時には、思わずふつと、親から貰った名前のほうを言い出してしまふのである。「僕を木村武雄と呼んでくれ給え。」と言ひ足してみたが、私は、やはりなんだか恥ずかしかった。

「木村たけお。」佐伯は、うなずいて、「木村武雄くんと一緒に来たんだがね。」

「木村たけお？ 木村、武雄くんですか？」障子の中でも、不審つぶやそうに呟つぶやいている。私は、

たまらなくなつて来た。木村武雄という名は、世界で一ばん愚劣なもののように思われた。「木村武雄という者ですが。」私は、やぶれかぶれに早口で言つて、「お願いがあつて、やつて来たんですけど。」

「おゆるし下さい。」意外の返事であつた。「初対面のおかたとは、お逢いするのが苦しいのです。」

「何を言つてやがる。相変らず鼻持ちならねえ。」と佐伯が小声で呟いたのを、障子のかなたから聞き取つた様子で、

「その鼻のことです。私は鼻を虫に刺されました。こんな見苦しい有様で、初対面のおかたと逢うのは、何より、つらい事です。人間は、第一印象が大事ですから。」

私たちは、爆笑した。

「ばかばかしい。」佐伯は、障子をがらりと開けて転げ込むようにして部屋へはいった。私も、おなかを抑えて笑い^{むせ}咽び^{むせ}よろよろ部屋へ、はいつてしまった。

薄暗い八畳間の片隅に、紺^{こんがすり}紺^{こんがすり}を着了丸坊主の少年がひとりきちんと膝を折つて坐つていた。顔を見ると、やはり、青本女之助に違いなかつた。熊本という逞しい名前の感じは全然、無かつたのである。白くまんまるい顔で、ロイド眼鏡の奥の眼は小さくしよぼし

よぼして、問題の鼻は、そういえば少し薄赤いようであったが、けれども格別、悲惨な事もなかった。からだは、ひどく、でっぷり太っている。背丈は、佐伯よりも、さらに少し低いくらいである。おしやれの様子で、襟えりもと元をやたらに気にして直しながら、

「佐伯君、少し乱暴じやありませんか。」と真面目な口調で言つて、「僕は、親にさえ、こういう醜い顔を見せた事はないのですからね。」つんとして見せた。

佐伯は、すぐに笑いを鎮しずめて、熊本君のほうに歩み寄り、

「読書かね？」と、からかうような口調で言い熊本君の傍にある机の、下を手さぐりして、一冊の文庫本を拾い上げた。机の上には、大形の何やら横文字の洋書が、ひろげられていたのであるが、佐伯はそれには一瞥いちべつもくれなかつた。「里見八犬伝か。面白そうだね。」と呟き、つつ立つたまま、その小さい文庫本のページをばらばら繰つてみて、「君は、いつでも読まない本を机の上にひろげて置いて、読んでる本は必ず机の下に隠して置くんだね。妙な癖があるんだね。」笑いもせず、そう言い放つて、その文庫本を熊本君の膝の上にはんと投げてやつた。

熊本君は、気の毒なほど露あらわに狼狽し、顔を真赤にして膝の上のその本を両手で抑え、「軽蔑し給うな。」と、ほとんど聞えぬくらいの低い声で言い、いかにも怨うらめしそうに佐

伯の顔を横目で見上げた。

私は部屋の隅にあぐらをかいて坐つて、二人の様子を笑いながら眺めていたが、なんだかひどく熊本君が可哀想になつて来て、

「里見八犬伝は、立派な古典ですね。日本のロマンの、」鼻祖と言いかけて、熊本君のいまの憂鬱要因に気がつき、「元祖ですね。」と言ひ直した。

熊本君は、救われた様子であつた。急にまた、すまり返つて、

「たしかに、そんなところもありますね。」赤い唇を、きゅつと引き締めた。「僕は最近また、ぼちぼち読み直してみているんですけれども。」

「へへ、」佐伯は、机の傍にごろりと仰向きに寝ころび、へんな笑いかたをした。「君は、どうしてそんな、ぼちぼち読み直しているなんて嘘ばかり言うんだね？　いつでも、必ずそう言うじゃないか。読みはじめた、と言つたつていいと思うがね。」

「軽蔑し給うな。」と再び熊本君は、その紳士的な上品な言葉を、まえよりいくぶん高い声で言つて抗議したのであるが、顔は、ほとんど泣いていた。

「里見八犬伝を、はじめて読む人なんか無いよ。読み直しているのに違ひない。」私は、仲裁してやつた。この二少年の戦いの有様を眺めているのも楽しかったが、それよりも、

今の私には、もつと重大な仕事があつた。

「熊本君。」と語調を改めて呼びかけ、甚だ唐突なお願ひではあるが、制服と帽子を、こ
んや一晚だけ貸して下さるまいか、と真面目に頼み込んだのである。

「制服と帽子？ あの、僕の制服と帽子ですか？」熊本君は不機嫌そうに眉まゆをひそめ、そ
れから、寝ころんでゐる佐伯のほうに向き直つて、「佐伯君、僕は不愉快ですよ。僕を、
あまり軽蔑しないで下さい。いつたい、この人は、なんですか？」

「いやなら、よせ。」佐伯は寝ころんだままで呶どな鳴つた。「無理に頼むわけじゃないんだ。
君こそ失礼だぞ。そこにゐる人は、いい人なんだ。君みたいなエゴイストじゃないんだ。」
「いや、いや。」私は佐伯に、いい人と言われて狼狽した。「僕だつて、エゴイストです。
佐伯君がいやだというのを僕が無理を言つて、ここへ連れて来てもらったのですから。事
情を申し上げてもいいんですけど、とにかく、僕から頼むのです。一晚だけ貸して下さい。
あしたの朝早く、必ずお返し致します。」

「勝手にお使い下さい。僕は、存じません。」と泣き声で言つて、くるりと、私の方に背
を向け、机の上の洋書を、むやみにぱつぱつとめくつた。

「よそうよ。僕は、どうなつたつて、いいんだ。」佐伯は上半身を起して、私に言った。

「それあ、いかん。」私は、断然首を横に振った。「君は、今になって、そんな事を言い出すのは、卑怯だ。ひきょうそれじゃ、まるで、僕が君にからかわれて、ここまでやって来たよなものだ。」

「なんですか。」熊本君は、私たちが言い争いをはじめたら、奇妙に喜びを感じた様子で、くるりと、またこちらに向き直り、「佐伯君が、また何か、はじめたのですか？ 深い事情があるようですね。」と、ひどく尊大な口調で言い、さも、分別ありげに腕組みをした。「もういいんだ。僕は、熊本なんかに、ものを頼みたくないんだ。」佐伯は、急に立ちあがった。「僕は、帰るぞ。」

「待て、待て。」私も立ち上って、佐伯を引きとめた。「君には、帰るところは無い筈だ。熊本君だって、制服を貸さないとはいってないんだ。君は、だだっ子と言われても仕様が無いよ。」

熊本君は、私が佐伯をやり込めると、どういうわけか、実に嬉しい様子であった。いよいよ得意顔して立ち上り、

「そうですね。だだっ子と言われても仕様が無いですとも。僕は、お貸ししないとは言っていないですからね。僕はエゴイストじゃありません。」壁に掛けてある制服と制帽を

颯つとはずして、百万円でも貸与する時のように、もったいぶった手つきで私のほうに差し出した。「お気に召しますか、どうですか。」

「いや、結構です。」私は思わず、ペこりとお辞儀をして、「ここで失礼して、着換えさせていただきます。」

着換えが終った。結構ではなかった。結構どころか、奇態であった。袖口からは腕が五寸も、はみ出している。ズボンも、やたらに太く、しかも短い。膝が、やつと隠れるくらいで、毛臍けすねが無残に露出している。ゴルフパンツのようである。私は流石さすがに苦笑した。

「よせよ。」佐伯は、早速さっそく嘲笑した。「なつてないじゃないか。」

「そうですね。」熊本君も、腕をうしろに組んで、私の姿をつくづく見上げ、見下し、「どういう御身分のおかたか存じませんけれど、これでは、私の洋服の評判まで悪くなります。」と言つて念入りに溜息まで吐いてみせた。

「かまわない。大丈夫だ。」私は頑張った。「こんな学生を、僕は、前に本郷で見た事があるよ。秀才は、たいてい、こんな恰好かっこうをしているようだ。」

「帽子が、てんで頭にはいらんじやないか。」佐伯は、またしても私にけちを附けた。

「いっそ、まっばだかで歩いたほうが、いいくらいだ。」

「僕の帽子は、決して小さいほうでは、ありません。」熊本君はもっぱら自分の品物にばかり、こだわっている。「僕の頭のサイズは、普通です。ソクラテスと同じなんです。」

熊本君の意外の主張には、私も佐伯も共に、噴き出してしまった。熊本君も、つい吊り込まれて笑ってしまった。部屋の空気は期せずして和やかになり、私たち三人、なんだか互に親しさを感じ合った。私は、このまま三人一緒に外出して、渋谷のまちを少し歩いてみたいと思った。日が暮れる迄には、まだ、だいぶ間が在る。私は熊本君から風呂敷を借りて、それに脱ぎ捨てた着物を包み、佐伯に持たせて、

「さあ行こう。熊本君も、そこまで、どうです。一緒にお茶でも、飲みましょう。」

「熊本は勉強中なんだ。」佐伯は、なぜだか、熊本君を誘うのに反対の様子を示した。

「これから、また、ぼちぼち八犬伝を読み直すのだから。」

「僕は、かまいません。」熊本君も、私たちと一緒に外出したいらしいのである。「なんだか、面白くなりそうですね。あなたは青春を恢復かいふくしたファウスト博士のようです。」

「すると、メフィストフェレスは、この佐伯君という事になりますね。」私は、年齢を忘れて多少はしゃいでいた。「これが、むく犬の正体か。旅の学生か。滑稽至極じゃ。」

たわむれて佐伯の顔を覗くと、佐伯の眼のふちが赤かった。涙ぐんでいるのである。今

夜の事が急に心配になつて来たのだらうと、私は察した。黙つて少年佐伯の肩を、どんと叩いて私は部屋から出た。必ず救つてやらうと、ひそかに決意を固くしたのである。

三人は、下宿を出て渋谷駅のほうへ、だらだら下りていった。路ですれちがう男女も、そんな私の姿を怪しまないようである。熊本君は、紺こんがすり紺あわせの袷あわせにフェルト草履ぞうり、ステッキを持つていた。なかなか気取つたものであつた。佐伯は、れいの服装に、私の着物在中の風呂敷包みを持ち、私は小さすぎる制服制帽に下駄ばきという苦学生の恰好で、陽春の午後の暖い日ざしを浴び、ぶらぶら歩いていたのである。

「どこかで、お茶でも飲みましょう。」私は、熊本君に伺つた。

「そうですねえ。せっかく、お近づきになつたのですし。」と熊本君は、もつたいぶり、「しかし、女の子のいるところは、割愛しましょう。きょうは、鼻が、こんなに赤いのですから。人間の第一印象は、重大ですよ。僕をはじめて見た女の子なら、僕が生まれた時からこんなに鼻が赤くて、しかもこの後も永久に赤いのだと独断するにきまつています。」真剣に主張している。

私は、ばかばかしく思つたが、懸命に笑いを泳こらえて、

「じゃ、ミルクホールは、どうでしょう。」

「どこだって、いいじゃないか。」佐伯は、先刻から意気銷沈しょうちんしている。まるで無意志の犬のように、ぶらりぶらり、だらしない歩きかたをして、私たちから少し離れて、ついて来る。「お茶に誘うなんてのは、お互、早く別れたい時に用いる手なんだ。僕は、人から追っぱらわれる前には、いつでもお茶を飲まされた。」

「それは、どういう意味なんですか。」熊本君は、くるりと背後の佐伯に向き直って詰め寄った。「へんな事を言い給うな。僕と、このかたとお茶を飲むのは、お互の親和力の結果です。純粹なんだ。僕たちは、里見八犬伝おひに於て共鳴し合ったのです。」

往来で喧嘩が、はじまりそうなので、私は閉口した。

「止し給え。止し給え。どうして君たちは、そんなに仲が悪いんだ。佐伯の態度も、よくないぞ。熊本君は、紳士なんだ。懸命なんだよ。人の懸命な生きかたを、嘲笑するのは、間違いだ。」

「君こそ嘲笑している癖に。」佐伯は、私にかかつて来た。「君は、老獺ろうかいだけなんだ。」

言い合っていると際限が無かった。私は、小さい食堂を前方に見つけて、

「はいろ。あそこで、ゆつくり話そう。」興奮して蒼ざめあお、ぶるぶる震えている熊本君

の片腕をつかんで、とつと歩き出した。佐伯も私たちの後から、のろのろ、ついて来た。「佐伯君は、いけません。悪魔です。」熊本君は、泣くような声で訴えた。「ご存じですか？　きのう留置場から出たばかりなんですよ。」

私は仰天した。

「知りません。全然、知りません。」

私たちは、もう、その薄暗い食堂にはいつていた。

第五回

私は暫く何も、ものが言えなかつた。裏切られ、ばかにされている事を知つた刹那の、あの、つんのめされるような苦い墜落の味を御馳走された気持で、食堂の隅の椅子に、どかりと坐つた。私と向い合つて、熊本君も坐つた。やや後れて少年佐伯が食堂の入口に姿を現したと思うと、いきなり、私のほうに風呂敷包みを投げつけ、身を翻して逃げた。私は立ち上つて食堂から飛び出し、二、三步追つて、すぐに佐伯の左腕をとらえた。そのまま、ずるずる引きずつて食堂へはいつた。こんな奴に、ばかにされてたまるか、という野

蛮な、動物的な格闘意識が勃然と目ざめ、とかく怯弱な私を、そんなにも敏捷に、ほとんど奇蹟的なくらい頑強に行動させた。佐伯は尚も、のがれようとして踉跄した。

「坐り給え。」私は彼を無理矢理、椅子に坐らせようとした。

佐伯は、一言も発せず、ぶるんと大きく全身をゆすぶって私の手から、のがれた。のがれて直ぐにポケットから、きらりと光るものを取り出し、

「刺すぞ。」と、人が変ったような、かすれた声で言った。私は、流石に、ぎよつとした。殺されるかも知れぬ、と一瞬思った。恐怖の絶頂まで追いつめられると、おのずから空虚な馬鹿笑いを発する癖が、私に在る。なんだか、ぞくぞく可笑しくて、たまらなくなるのだ。胆が太いせいでは無くて、極度の小心者ゆえ、こんな場合ただちに発狂状態に到達してしまうのであるという解釈のほうが、より正しいようである。

「はははは。」と私は空虚な笑声を発した。「恥ずかしくて、きりきり舞いした揚句の果には、そんな殺伐なポオズをとれたがるものさ。覚えがあるよ。ナイフでも、振り上げないことには、どうにも、形がつかなくなつたのだろう?」

佐伯は、黙って一歩、私に近寄つた。私は、さらに大いに笑つた。佐伯は、ナイフを持ち直した。その時、熊本君は、佐伯の背後からむずと組み附いて、

「待つて下さい。」と懸命の金切り声を挙げ、「そのナイフは、僕のナイフです。」と又しても意外な主張をしたのである。「佐伯君、君はひどいじゃないか。そのナイフは、僕の机の左の引出しにはいつていたんでしよう？ 君は、さっき僕に無断で借用したのに、ちがいません。僕は、人間の名誉というものを重んずる方針なのだから、敢^あえて、盗んだとは言いません。早く返して下さい。僕は、大事にしていたんだ。僕は、この人に帽子と制服だけは、お貸ししたけれど、君にナイフまでは、お貸しした覚えが無いのです。返して下さい。僕は、お姉さんから、もらったんだ。大事にしていたんですよ。返して下さい。そんなに乱暴に扱われちゃ困りますよ。そのナイフには、小さい^{はさみ}鋏も、缶^{かんき}切りも、その他三種類の小道具が附いているんですよ。デリケエトなんですよ。ごしようだから返して下さい。」と、れいの泣き声で、わめき散らしたのである。

悪漢佐伯も、この必死の抗議には参つたらしく、急に力が抜けた様子で、だらりと両腕を下^{そうはく}げ、蒼^{そうはく}白の顔に苦笑を浮かべ、

「返すよ。返すよ。返してやるよ。」と自嘲の口調で言つて、熊本君の顔を見ずにナイフを手渡し、どたりと椅子に腰を下した。

「さあ、何とでも言うがいい。」と佐伯は、ほんものの悪党みたいな、下品な口をきいた

ので、私は興醒めして、しきりに悲しかった。佐伯の隣りの椅子に、腰をおろして、

「五一郎君、」とはじめて佐伯の名を、溜息と共に言い、「そんなふてくされたもの言いかたをするものじゃないよ。君らしくも無いじゃないか。」

「猫撫で声は、よしてくれ。げろが出そうだ。はつきり負けた奴に、そんなに優しくお説教をはじめるのは、いい気持のものらしいね。」佐伯は、顔を不機嫌にしかめて、強く、吐き出すように言い、両腕をぐったりテエブルの上に投げ出した。手が附けられぬくらいに、ふてくされてしまっている。私は、いよいよ味気ない思いであった。

「君はくだらない奴だね。」と私は、思つたままを、つい言つてしまった。

「ああ、そうさ。」すぐに、はね返して寄こすのである。「だから、はじめから、言つてるじゃねえか。説教なんか、まっぴらだつて言つたじゃないか。放つて置いてくれたつていいんだ。」まっすぐに、食堂の壁を見ながら言つているのであるが、その眼は薄く涙ぐんでいた。私は、その様を見て何だか、ものを言うのが再び、いやになった。熊本君は、ちやんと私たちと向い合つて坐つていて、いましがた死力を尽して奪い返したデリケエトのナイフが、損傷していないかどうか、たんねんに調べ、無事である事を見とどけてから、ハンケチに包んで右の袂の中にしまい込み、やつと、ほつとしたような顔になり、私たち

二人を改めてきよるきよる見比べ、

「なんですか？ さて、どうしたのですか。あなたのおっしゃる事にも、また、佐伯君の申す事にも、一応は首肯しゅこんできるような気がするのですけれど、もっと、つき進めた話を伺わないことには。」と、あくまで真面目くさった顔で言い、「コオヒイにしますか。それとも何か食べますか。とにかく何か、注文いたしましょう。ゆっくり話し合ってみたら、或は一致点に到達できるかも知れませんかね。」熊本君は、私たち二人に更に大いに喧嘩させて、それを傍で分別顔して聞きながら双方に等分に相槌あいづちを打つという、あの、たまらぬ楽しみを味わうつもりでいるらしかった。佐伯は逸いちはや早く、熊本君の、そのずるい期待を見破った様子で、

「君は、もう帰ったらどうだい。ナイフも返してやったし、制服と帽子も今すぐ、この人が返してあげるそうさ。ステッキを忘れないようにしろよ。」にこりともせず、落ちついた口調で言ったのである。

熊本君は、もう既に泣きべそを掻かいて、

「そんなに軽蔑しなくてもいいじゃないですか。僕だって、君の力になってやろうと思っ
ているのですよ。」

私は、熊本君のその懸命の様子を、可愛く思った。

「そうだ、そうだ。熊本君は、このとおり僕に制服やら帽子やらを貸してくれたし、謂わば大事な人だ。ここにいてもらったほうがいい。コオヒイ、三つだ。」私は、食堂の奥のほうに向つて大声でコオヒイを命じた。薄暗い、その食堂の奥に先刻から、十三、四歳の男の子が、ぼんやり立つて私たちのほうを眺めていたのである。

「母ちゃん、お風呂へ行つた。」その、まだ小学校に通っているらしい男の子は、のろい口調で答えるのである。「もうすぐ、帰つて来るよ。」

「ああ、そうか。」私は瞬間、当惑した。「どうしましょう。」と小声で熊本君に相談した。

「待つていましょう。」熊本君は、泰然たいぜんとしていた。「ここは、女の子がいらないから、気がとても楽です。」やはり、自分の鼻に、こだわっている。

「ビールを飲めば、いいじゃないか。」佐伯は、突然、言い出した。「そこに、ずらりと並んである。」

見ると、奥の棚にビールの瓶が、成程なるほどずらりと並んである。私は、誘惑を感じた。ビールでも一ぱい飲めば、今の、この何だかいらした不快な気持を鎮静させることが出

来るかも知れぬと思つた。

「おい、」と店番の男の子を呼び、「ビールだったら、お母さんがいなくても出来るわけだね。栓せんぬ抜きと、コップを三つ持つて来ればいいんだから。」

男の子は、不承不承うなずに首肯うなずした。

「僕は、飲みませんよ。」熊本君は、またしても、つんと気取つた。「アルコールは、罪悪です。僕は、アカデミックな態度を、とろうと思ひます。」

「誰も君に、」佐伯は、やや口を尖らせて言つた。「飲めと言つてやしないよ。へんな事を言わないで、お姉さんに叱られますと言つたほうが、早わかりだ。」

「君は、飲むつもりですか？」熊本君も、こんどは、なかなか負けない。「止し給え。僕は、忠告します。君は、おとといもビールを飲んだそうじゃないですか。留置場に、とめられたつて、学校じゃ評判なんですよ。」

男の子が、ビールを持つて来て、三人の前に順々にコップを置くが早いか熊本君は、一つのコップを手を取つて憤然、ぱたりと卓の上に伏せた。私は内心、閉口した。

「よし、佐伯も飲んじやいかん。僕が、ひとりで飲もう。アルコールは、本当に、罪悪なんだ。なるべくは、飲まぬほうがいいのだ。」言いながら、私はビール瓶の栓を抜き、ひ

とりで自分のコップに注いで、ぐつと一息で飲みほした。うまかった。「ああ、まずいな。
 。」とてれ隠しの嘘をついて、「僕も、アルコールは、きらいなんだ。でも、ビールは、
 そんなに酔わないからいいんだ。」何かと自己弁解ばかりして、「アカデミックな態度ば
 かりは、失いたくありませんからね。」と熊本君にまで卑しいお追ついで従しゅうを言ったのであ
 る。

「そうですとも。」熊本君は、御機嫌を直して、尊大な口調で相槌打った。「私たちは、
 パルナシヤンです。」

「パルナシヤン。」佐伯は、低い声でそつと呟つぶやいていた。「象牙ぞうげの塔か。」

佐伯の、その、ふつと呟いた二言には、へんにせつない響きがあつた。私の胸に、きり
 きり痛く喰いいった。私は、更に一ぱいビールを飲みほした。

「五一郎君、」と私は親愛の情をこめて呼んだ。「僕には、なんでも皆わかつているのだ
 よ。さつき君が僕に風呂敷包みを投げつけて、逃げ出そうとした時、はつと皆わかつてし
 まつたのだ。君は、僕をだましたね。いや、責めるのじゃない。人を責めるなんて、むず
 かしい事だ。僕は、わかつたけれども、何も言えなかつたのだ。言うのが、つらくて、い
 つそ知らん振りしていいようかとさえ思つたのだが、いまビールの酔いを借りて、とうとう

言い出したわけだ。いや、考えてみると、君が僕に言わせるようにしむけてくれたのかも知れないね。ビールを見つけてくれたのは、君なんだから。」

「なるほど、」と熊本君は小声で呟き、「佐伯君には、そんな遠大な思いやりがあつて、ビールのことを言い出したというわけですね。なるほど。」としきりに首肯うなずいて腕組みした。

「そんな、ばかな思いやりつて、あるものか。」佐伯は少し笑つて、「僕は、ただ、その、ほら、——」と言ひよじ澱んで、両手でやたらに卓の上を撫で廻した。

「わかつてるよ。僕の機嫌を取ろうとしたのだ。いやそう言っちゃいけない。この場の空気を、明るくしようと努めてくれたのさ。佐伯は、これまで生活の苦勞をして来たから、そんな事には敏感なんだ。よく気が附く。熊本君は、それと反対で、いつでも、自分の事ばかり考えている。」ビールの酔いに乗じて、私は、ちくりと熊本君を攻撃してやった。「いや、それは、」熊本君は、思いがけぬ攻撃に面くらつて、「そんなことは、主観の問題です。」と言つて、それからまた、下を向いてぶつぶつ二言、三言つぶやいていたが、私には、ちつとも聞きとれなかつた。

私は次第に愉快になつた。謂わば、気が晴れて来たのである。ビールを、更に、もう一

本、注文した。

「五一郎君、」と又、佐伯のほうに向き直り、「僕は、君を、責めるんじゃないよ。人を責める資格は、僕には無いんだ。」

「責めたつていいじゃないか。」佐伯も、だんだん元気を恢復して来た様子で、「君は、いつでも自己弁解ばかりしているね。僕たちは、もう、大人の自己弁解には聞き厭あきてるんだ。誰もかれも、おつかなびつくりじゃないか。一も二も無く、僕たちを叱りとばせば、それでいいんだ。大人の癖に、愛だの、理解だのつて、甘ったるい事ばかり言つて子供の機嫌をとつているじゃないか。いやらしいぞ。」と言いつつ、ぷいと顔をそむけた。

「それあ、まあ、そうだがね。」と私は、醜く笑つて、内心しまった！ と狼狽していたのだが、それを狡猾に押し隠して、「君の、その主張せざるを得ない内心の怒りには、同感出来るが、その主張の言葉には、間違いが在るね。わかるかね。大人も、子供も、同じものなんだよ。からだが少し、薄汚くなつていただけだ。子供が大人に期待しているように、大人も、それと同じ様に、君たちを、たのみにしているものなのだ。だらしの無い話さ。でも、それは本当なんだ。力と、たのんでいるのだ。」

「信じられませんね。」と熊本君は、ばかに得意になつてしまつて、私を憐れむように横

目で見下げて言った。

「君たちだって、ずるいんだ。だらし無いぞ。」私はビールを、がぶがぶ飲んで、「少し優しくすると、すぐ、程度を越えていい気になるし、ちよつと強く言おうと思うと、言われぬ先から、泣きべそをかいて逃げたがるじゃないか。君たちに自信を持つてもらいたくて、愛だの、理解だのと遠廻しに言っているのに、君たちは、それを軽蔑する。君たちが、もう少し強かったら、それは安心して叱りとばしてやる事も出来るんだ。君たちさえ、——」

「水掛け論だ。」佐伯は断定を下した。「くだらない。そんな言い古された事を、僕たちは考えているんじゃないよ。しっかりした人間とは、どんなものだから、それを見せてもらいたいんだ。」

「そうですね。」熊本君は、ほつとした顔をして、佐伯の言を支持した。「酒を飲む人の話は、信用出来ませんからね。」と言って、頬かすに幽びんしかなしょう憫びんし笑しょうを浮かべた。

「僕は、だめだ。」そう言つて、私には、腹にしみるものが在った。「けれども僕は、絶望してないんだ。酒だつて、たまにしか飲まないんだ。冷水摩擦だつて、毎日やっているんだ。」自分ながら奇妙と思われたような事を口走つて、ふつと眼が熱くなり、うろたえた。

第六回

「青年よ、若き日のうちに享樂せよ！」

と教えし賢者の言葉のままに、

振舞うた我の愚かさよ。

(悔ゆるともいまは詮なし)

見よ！ 次のペエジにその賢者

素知らぬ顔して、記し置きける、

「青春は空くうに過ぎず、しかして、

弱冠は、無知に過ぎず。」(フランソワ・ヴィヨン)

むかし、フランソワ・ヴィヨンという、パリ巴里生まれの気の小さい、弱い男が、「ああ、残念！ あの狂おしい青春の頃に、我もし学にいそしみ、風習のよろしき社会にこの身を寄せていたならば、いま頃は家も持ち得て快き寢床もあろうに。ばからしい。悪童の如く

学び舎を叛き去つた。いま、そのことを思い出す時、わが胸は、張り裂けるばかりの思いがする！」と、地団駄踏んで、その遺言書に記してあつたようだが、私も、いまは、その痛切な嘆きには一も二も無く共鳴したい。たかが熊本君ごときに、酒を飲む人の話は、信用できませんからね、と憫笑を以て言われても、私には、すぐに撥ね返す言葉が無い。冷水摩擦を毎日やっていると言つてみたところで、それがこの場合、どうなるというものでもない。つまらない事を口走つたものである。けれども私には、それが精一ぱいであつたのである。私には、謂わば政治的手腕も無ければ、人に号令する勇氣も無し、教えるほどの学問も無い。何とかして明るい希望を持つていたいと工夫の揚句が、わずかに毎朝の冷水摩擦くらいのところである。けれども無頼の私にとっては、それだけでも勇猛の、大事業のつもりでいたのだ。私は、いまこの二少年の憫笑に遭い、自分の無力弱小を、いやになるほど知らされた。私が、ふっと口を噤んで片手にビールのコップを持ったまま思いに沈んでいるのを、見兼ねたか、少年佐伯は、低い声で、

「何も、そんなに卑下して見せなくなつて、いいじゃないか。」と私を慰め諭すように言つて、私の顔を覗き込み、「ごめんよ。君は知っているね。僕は、恥ずかしかつたんだ。本当の事を、どうしても言えなかつたんだ。でも、僕は嘘つきじゃない。たった一つだけ

嘘を言ったんだ。映画の会は、おととい、やっちゃったんだ。僕は、説明しちやったんだ。だから、僕は、おとといの夜、会が済んでから制服も靴も売り払って、街でビールを飲んで、お巡りさんに見つかって、それから、——」

「わかつてる。」私は顔を揚げて、佐伯の告白を払いのけるように片手を振った。「君に罪は無いんだ。みんな話の行きがかりだ。僕が、そそっかしいんだよ。君は、はじめから僕が渋谷へなど来るのをいやがっていたんだものね。」大きい溜息が出て、胸の中が、すつとした。

「うん、」佐伯は、恥ずかしそうに小さく首肯うなずき、「言い直すひまが無かったんだよ。僕は、なんぼ何でも、映画の説明なんて、そんなだらし無い事を、やっちゃったとは、言えなかつたんだよ。だから、ね、」と又もや、両手でテエブルの上を矢鱈やたらに撫で廻しながら、「そこんところを、嘘ついちゃったんだよ。ごめんね。留置場へ入れられた事なんかを君に言うと、君に嫌われると思ったんだ。僕は、だめなんだよ。葉山にも、いままでお世話になつてゐるんだし、映画説明なんてばかりしいとは思つたけれど、最後のお礼のつもりで、おとといの晩、大勢の女の子の前でやっちゃったんだよ。やっちゃってから、いけな
いと思つた。もう僕は、だめになつたと思つた。見込みの無い男だと思つた。僕にもビイ

ルを一ぱい下さい。僕は、いまは嬉しいのだ。何だか、ぞくぞく嬉しいのだ。木村君、君は、偉い人だね。君みたいに、何も気取らないで、僕たちと一緒に、心配したり、しよげたりしてくれると、僕たちには、何だか勇氣が出て来るのだ。こうしては居られないと思うんだ。勉強しようと、しんから思うようになるんだ。僕は、心の弱さを隠さない人を信頼する。「立ち上って、三つのコップになみなみとビールを注いだ。決然たる態度であった。「乾杯だ！ 熊本も立て。喜びのための一ぱいのビールは罪悪で無い。悲しみ、苦悩を消すための杯は、恥じよ！」

「では、ほんの一ぱいだけ。」熊本君は、佐伯の急激に高揚した意気込みに圧倒され、しぶしぶ立って、「僕は事情をよく知らんのですからね、ほんのお附合いですよ。」

「事情なんか、どうだつていいじゃないか。僕の出発を、君は喜んでくれないのか？ 君は、エゴイストだ。」

「いや、ちがいます。」熊本君も、こんどは敢然と報いた。「僕は、物事を綿密に考えてみたいんだ。納得出来ない祝宴には附和雷同ふわりいどうしません。僕は、科学的なんです。」

「ちえっ！」佐伯は、たちまち嘲笑した。「自分を科学的という奴は、きまつて科学を知らないんだ。科学への、迷信的なあこがれだ。無学者の証拠さ。」

「よせ、よせ。」私も立上り、「熊本君は、てれているんだ。君の、おくめんも無い感激振りに辟易へきえきしたんだ。知識人のデリカシイなんだよ。」

「古い型のね。」佐伯は低く附け加えた。

「乾杯します。」と熊本君は、思いつめた果のような口調で言った。「僕は、ビールを飲むと、くしゃみするんです。僕は、その事を科学的と言ったんです。」

「正確だ。」佐伯は、噴き出した。私も笑った。

熊本君は笑わず、ビールのコップを手にとって目の高さまで捧げ、それから片手で着物の襟えりをきちんと掻かき合わせて、

「佐伯君の出発を、お祝いいたいします。あしたから、また学校へ出て来て下さい。」真剣な、ほろりとするような声であった。

「ありがとう。」佐伯も上品に軽くお辞儀をして、「熊本が、いつもこんなに優しく勇敢であるように祈っています。」

「佐伯君にも、熊本君にも欠点があります。僕にも、欠点があります。助け合って行きたいと思います。」私は、たいへん素直な気持で、そう言つて泡立つビールのコップを前方に差し出した。

カチリと三つのコップが逢つて、それから三人ぐつと一息に飲みほした。途端に、熊本君は、くしゃんと大きいくしゃみを発した。

「よし。よろこびのための酒は一杯だけにして止めよう。よろこびを、アルコオルの口実にしてはならぬ。」私は、もつとビールを飲みたかつたのだが、いまこの場の空気を何故だか、ひどく大事にして置きたくて、飲酒の欲望を辛く^{から}^{こら}ええた。「君たちも、これから、なるべくならビールを飲むな！ カール・ヒルティ先生の曰く、^{いわ}諸君は教養ある学生であるから、酒を飲んでも乱に陥らない。故に無害である。否、時には健康上有益である。しかし、諸君を真似て飲む中学生、又は労働者たちは自らを制することが出来ぬため、酒に溺れ、その為に身を亡す危険が多い。だから諸君は、彼等のために！ 彼等のために酒を飲むな、と。彼等のため、ばかりではない。僕たちの為にも、酒を飲むな。僕たちは、悪い時代に育ち、悪い教育を受け、暗い学問をした。飲酒は、誇りであり、正義感の表現でさえあつたのだ。僕たちの、この悪癖を^{きれい}綺麗に抜くのは至難である。君たちに頼む。君たちさえ、清潔な明るい習慣を作ってくれたら、僕たちの暗黒の虫も、遠からずそれに従うだろう。僕たちに負けてはならぬ。打ち勝て。以上、一般論は終りだ。どうも僕は、こんなわかり切つたような概念論は、^{ふえて}不得手なのだ。どんな、つまらない本にだつて、そんな

事は、ちゃんと書かれてあるんだからね。なるべくなら僕は、清潔な、強い、明るい、なんてそんな形容詞を使いたくないんだ。自分のからだに傷をつけて、そこから嘖き出た言葉だけで言いたい。下手くそへたでもいい、自分の血肉を削った言葉だけを、どもりながら言いたい。どうも、一般論は、てれくさい。演説は、これでやめる。」

熊本君は、さかんに拍手した。佐伯は、立ったまま、にやにや笑っている。私は普通の語調にかえって、

「佐伯君、僕に二十円くらいあるんだがね、これで制服と靴とを買い戻し給え。また、外形は、もとの生活に帰るのだ。葉山氏の家にも、辛抱して行き給え。わびしい時には、下宿で毛布をかぶって勉強するのだ。それが一ばん華やかな青春だ。何くそと固パンかじって勉強し給え。約束するね？」

「わかってるよ。」佐伯は、ひどく赤面しながらも、口だけは達者である。「そんな事と言っていると、君の顔は、まるで、昔のさむらいみたいに見えるね。明治時代だ。古くさいな。」

「士族のお生まれではないでしょうか。」熊本君は、また変な意見を、おずおず言い出した。

私は噴き出したいのを泳えて、

「熊本君、ここに二十円あります。これで、佐伯の制服と制帽と靴を買い戻してやって下さい。」

「要らないよ、そんなもの。」佐伯は、いよいよ顔を真赤にして、小声で言った。

「いや、君にあげるわけじゃないんだ。熊本君の友情を見込んで、一時、おあずけするだけだ。」

「わかりました。」熊本君は、お金を受け取り、眼鏡の奥の小さい眼を精一ぱいに見開いて、直立不動の姿勢で言った。「たしかに、おあずかり致します。他日、佐伯君の学業成った暁には、——」

「いや、それには及びません。」私は、急に、てれくさくて、かなわなくなった。お金など、出さなければよかつたと思つた。「ここを出しましょう。街を、少し歩いて見ましょう。」

街は、もう暮れていた。

私ひとり、やはり多少、酔っていた。自分のたいへんな、苦学生の姿も忘れて、何かと大声で、ばかな事ばかりしやべり散らしていた。

「おい佐伯、その風呂敷包みは重くないか。僕が、かわりに持ってやろう。いいんだ、僕によこせ。よし来た。アル・テル・ナ・テ・ヴ・マン、と。知ってるかい？ どっこいしよの、うんとこしよつて意味なんだ。フロオベエルは、この言葉一つに、三箇月も苦心したんだぞ。」

ああ、思えば不思議な宵であつた。人生に、こんな意外な経験があるとは、知らなかつた。私は二人の学生と、宵の渋谷の街を酔つて歩いて、失つた青春を再び、現実に取り戻し得たと思つた。私の高揚には、限りが無かつた。

「歌を歌おう。いいかい。一緒に歌うのだよ。アイン、ツワイ、ドライ。アイン、ツワイ、ツワイ、ツワイ、ツワイ、ツワイ、ドライ。アイン、ツワイ、ドライ。よし。」

ああ消えはてし 青春の

愉樂ゆくえの行衛 今いずこ

心のままに 興じたる

黄金こがねの時よ 玉の日よ

汝いまし帰らず その影を

求めて我は 歎くのみ

ああ移り行く世の姿

ああ移り行く世の姿

塵をかぶりて 若人の

帽子は古び 粗衣は裂け

長剣は錆を こうむりて

したたる光 今いずこ

宴の歌も 消えうせつ

刃音拍車の 音もなし

ああ移り行く世の姿

ああ移り行く世の姿

されど正しき 若人の

心は永久に 冷むるなし

勉めの日にも 嬉戯の

つどいの日にも 輝きつ

古^ふりたる殻^かは 消^けゆるとも

実^みこそは残^{のこ}れ 我^{わが}が胸^{むね}に

その実^みを犇^{ひし}と護^{まも}らなん

その実^みを犇^{ひし}と護^{まも}らなん」(アルト・ハイデルベルヒ)

歌^{うた}っているのは、私^{わたし}だけであつた。調^{てう}子はずれの洞^{どう}間^ま声^{こゑ}で、臆^{おく}することなく呶^ど鳴^なり散^{さん}らして^らいたのだが、歌^{うた}い終^{しま}つて、「なん^んだ、誰^{たれ}も歌^{うた}つてや^やし^しない^いじ^じや^やない^いか。も^もう^う一^{いっ}ぺん。ア^あイン、ツ^つワイ、ド^どライ！」と叫^{こゑ}んだ時^{とき}に、

「お^おい、お^おい。」と背^せ後^ごから肩^{かた}を叩^{たた}かれた。振^ふり向^むいて見^みると、警^{けい}官^{くわん}である。「宵^よの口^{くち}か^から、そ^そんなに騒^{さわ}いで歩^あいては、悪^{あく}い^いじ^じや^やない^いか。君^{きみ}は、ど^どこ^この^の学^{がく}生^{せい}だ。隠^{ひそ}さ^さず^ずに言^いつて^てみ^み給^{たま}え。」

私^{わたし}は自^じ分^{ぶん}の運^{うん}命^{めい}を直^ち覚^{かく}した。こ^これ^れは、し^しま^まつ^つた。私^{わたし}は学^{がく}生^{せい}の姿^{すがた}である。三^{さん}十^{じゅう}二^に歳^{さい}の醉^{すい}詩^し人^{じん}ではな^なかつ^つた。ち^ちよ^よつ^つと^とのお詫^わび^びでは、ゆ^ゆる^るさ^され^れそ^そう^うも^もな^ない。絶^{ぜつ}体^{たい}絶^{ぜつ}命^{めい}。逃^にげ^げよ^うう^うか。

「おい、おい。」重ねて呼ばれて、はつと我に帰った。私は、草原の中に寝ていた。陽はまだ高い。ひぼりの声が聞える。ようやく気が附いた。私は、やはり以前の、井の頭公園の玉川上水の土堤どての上に寝そべっていたのである。見ると、少年佐伯は、大学の制服、制帽で、ぴかぴか光る靴をはき、ちゃんと私の枕元に立っている。

「おい、僕は帰るぞ。」と落着いた口調で言い、「君は、眠っちゃったじゃないか。だから、僕は帰るぞ。」と落着いた口調で言い、「君は、眠っちゃったじゃないか。だから、僕は帰るぞ。」と落着いた口調で言い、「君は、眠っちゃったじゃないか。だから、僕は帰るぞ。」

「眠った？　僕が？」

「そうさ。可哀そうなアベルの話聞かせているうちに、君は、ぐうぐう眠っちゃったじゃないか。君は、仙人みたいだったぞ。」

「まさか。」私は淋さびしく笑った。「ゆうべから、ちつとも寝ないで仕事をしていたものだから、疲れが出ちゃったんだね。永いこと眠っていたかい？」

「なに十分か十五分かな？　ああ、寒くなった。僕は、もう帰るぜ。しっけい。」

「待ち給え。」私は、上半身を起して、「君は、高等学校の生徒じゃなかったかね？」

「あたり前さ。大学へはいる迄は、高等学校さ。君は、ほんとうに頭が悪いね。」

「いつから大学生になったんだい？」

「ことしの三月さ。」

「そうかね。君は、佐伯五一郎というんだらう？」

「寝呆ねぼけていやがる。僕は、そんな名前じゃないよ。」

「そうかね。じゃ、何だつて、この川をはだかで泳いだりしたんだね？」

「この川が、気に入ったからさ。それくらいの気まぐれは、ゆるしてくれたっていいじゃないか。」

「へんな事を聞くようだが、君の友人に熊本君という人がいないかね？　ちよつと、こう気取つた人で。」

「熊本？——無いね。やはり、工科かね？」

「そうじゃないんだ。みんな夢かな？　僕は、その熊本君にも逢いたいんだがね。」

「何を言つてやがる。寝呆ねぼけているんだよ。しっかりし給え。僕は、帰るぜ。」

「ああ、しつけない。君、君、」と又、呼びとめて、「勉強し給えよ。」

「大きにお世話だ。」

颯さつ爽そうと立ち去つた。私は独ひとり残され、侘わびしさ堪え難い思ひである。その実を犇ひしと護らなん、と呶鳴るやうにして歌つた自分の声が、まだ耳の底に残っているやうな気がする。

白日夢。私は立上つて、茶店のほうに歩いた。袂たもとをさぐつてみると、五十銭紙幣は、やはりちゃんと残つて在る。佐伯君にも、熊本君にも欠点があります。僕にも、欠点がありません。助け合つて行きたいと思ひます、という私の祝杯の辞も思ひ出された。いまずぐ、渋谷へ飛んで行つて、確かめてみたいとさえ思つたが、やはり熊本君の下宿の道順など、朦朧もうろうとしてゐる。夢だったのに違ひない。公園の森を通り抜け、動物園の前を過ぎ、池をめぐつて馴染なじみの茶店にはいつた。老婆が出て来て、

「おや、きようは、お一人？ おめずらしい。」

「カルピスを、おくれ。」おおいに若々しいものを飲んでみたかつた。

茶店の床しょうじ几ぎにあぐらをかいて、ゆつくりカルピスを啜すすつてみても、私は、やはり三十歳みの下手な小説家に過ぎなかつた。少しも、若い情熱が湧わいて来ない。その実みを犇ひしと護まもらなん、その歌の一句を、私は深刻な苦笑でもつて、再び三度みたび、反芻はんすうしているばかりであつた。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年10月25日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：小林繁雄

2000年2月10日公開

2004年3月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

乞食学生

太宰治

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>